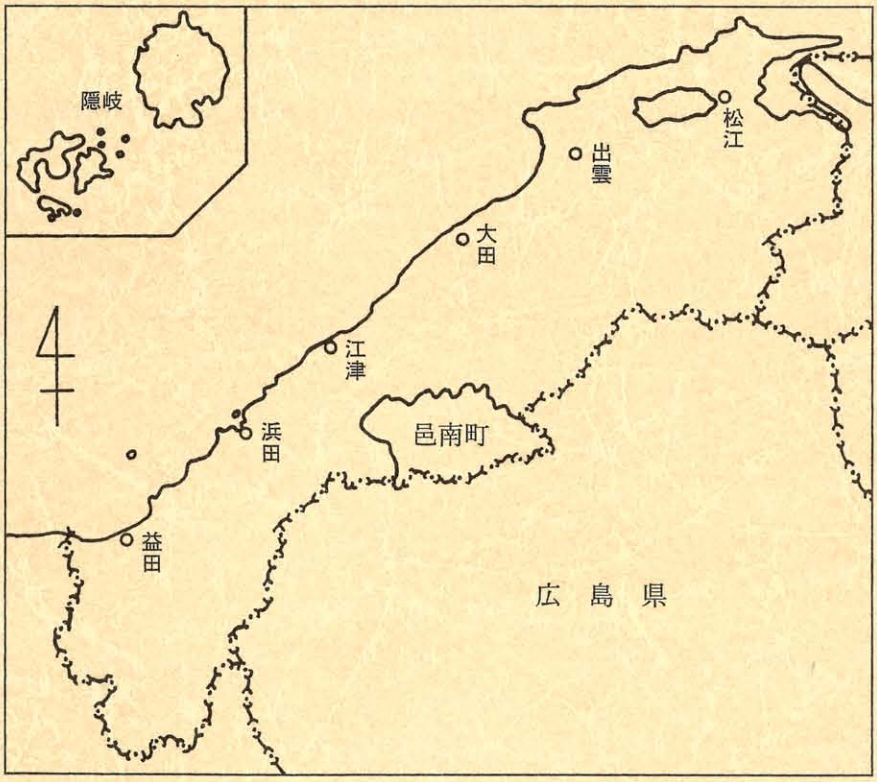
島根県邑智郡邑南町

八色石経塚発掘調査報告書

平成21年度（主要地方道）邑南飯南線八色石工区地域活力基盤創造交付金
（改良）工事第１期に係る埋蔵文化財発掘調査



2011年３月

島根県邑智郡邑南町教育委員会

序

邑南町は島根県中央南部に位置し、旧石器時代から近現代までの遺跡が約1000ヶ所散在します。

この度調査の報告をさせていただく八色石経塚は、それら多くの遺跡の中でも数少ない遺跡のひとつです。発掘調査は、主要地方道邑南飯南線の改良工事により直接影響を受けるため実施したもので、経塚の調査は邑南町でも初めてのことでありました。調査の結果をここに報告いたします。今後これらの成果が、近世における当地方の民衆信仰研究の一助になれば幸いです。

なお、調査しました経塚は、調査成果に基づき移築復元をいたしました。今回の調査でご指導やお力添えをいただきました多くの方々に深甚の謝意を表する次第であります。

平成23年３月

邑南町教育委員会

教育長　土　居　達　也

例　言

1．本報告書は島根県邑智郡邑南町八色石714番地４における主要地方道邑南飯南線道路改良工事に伴い、平成21年12月16日から平成22年３月31日にわたって調査を実施した八色石経塚発掘調査の報告書である。

2．本報告書の執筆編集は森岡弘典、角矢永嗣が行った。

3．本書掲載の写真は角矢永嗣が行い、遺物実測、トレース等は市山真由美が行った。

4．本書掲載の地形図（第２図）は、建設省国土地理院長の承認を得て（承認番号平16中複第67号）同院発行の25000分の１を複製した邑南町管内図を使用したものである。

5．本書掲載図面の矢印は真北を示している。

6．出土遺物、実測図、写真は邑南町教育委員会で保管している。

7．本書６～10頁の図に表示したＸ軸Ｙ軸は国土法による第Ⅲ座標系の軸方向である。

8．地形測量、経塚実測図は測地技研（株）に委託した。

島根県邑智郡邑南町

八色石経塚発掘調査報告書

目　次

序

頁

Ⅰ．調査に至る経緯と経過……1

Ⅱ．八色石経塚の位置と環境……3

Ⅲ．調査の概要と出土遺物……5

Ⅳ．まとめ……17

図版・挿図・表目次

図版第１　a．平成３年分布調査時写真（北西から）　b．同（同）　c．調査前遠景（南西から）

図版第２　a．調査前近景（北西から）　b．同（南東から）　c．石積（北西から）

図版第３　a．経塚（北東から）　b．同（東から）　c．同（南東から）

図版第４　a．経塚南側（北西から）　b．同北側（北東から）　c．同東側（東から）

図版第５　a．経塚南側（南から）　b．経塚と踏み段（北から）　c．銭貨出土状況

図版第６　a．「ひしね地蔵」（北から）　b．経塚埋土状況（南から）c．土坑検出状況（北から）

図版第７　a．土坑埋土状況（南東から）　b．土坑完掘状況（北から）c．同（南から）

図版第８　a．経石　b．銭貨（表）c．同（裏）

図版第９　a．銭貨（鉄貨）b．五輪石（空・風輪部）c．宝篋印塔（相輪部）

図版第10　a．使用痕のある石　b．ひしね地蔵１　c．同２

図版第11　a．西光院跡より採集した遺物（五輪石空・風輪部）b．同（相輪部）

図版第12　a．宗林寺経塚出土経石　b．経塚移築後写真　c．同

第１図　邑南町域と八色石経塚位置図……3

第２図　八色石経塚付近遺跡分布図……4

第３図　八色石経塚周辺地形測量図……6・7

第４図　八色石経塚実測図……8・9

第５図　土坑配置図……10

第６図　土坑実測図……10

第７図　経石実測図……11

第８図　銭貨拓影……12

第９図　五輪石（空・風輪部）、宝篋印塔（相輪部）実測図……13

第10図　使用痕のある石実測図……14

第11図　ひしね地蔵実測図……15

第12図　西光院跡より採集した遺物実測図（五輪石空風輪部・宝篋印塔相輪部）……16

第１表　島根県石見部の経塚……20

Ⅰ．調査に至る経緯と経過

１．調査に至る経緯

主要地方道邑南飯南線は邑南町と飯石郡飯南町を結ぶ幹線道路で、交通量の増加により住民から道路改良の要望がなされていた。この要望に応えるため、島根県県央県土整備事務所により以前より計画的に２車線道路に改良工事が行われてきた。

この度、新たに道路改良の計画がなされ、県央県土整備事務所から改良工事予定地内の文化財等の有無及び取り扱いについて協議があり（平成21年７月24日付け央整第2971号）、工事予定地内に八色石経塚が所在することが判明した。

遺跡の取り扱いについて協議を重ねたが、遺跡の立地場所や道路の線形等を勘案すると遺跡内を通過せざるを得ないとの結論に達し、道路改良予定地内に所在する八色石経塚の発掘調査を実施することとなった。

調査は平成21年12月16日から平成22年３月31日にわたり次の体制で実施した。

調査主体　　邑南町教育委員会

調　査　員　　角矢　永嗣（邑南町教育委員会文化財係長）

調査指導　　是田　　敦（島根県教育庁文化財課文化財保護主任）
　　吉川　　正（邑南町文化財保護審議会副会長）

事　務　局　　土居　達也（邑南町教育委員会教育長）
　　森岡　弘典（邑南町教育委員会生涯学習課長）
　　能美　恭志（邑南町教育委員会課長補佐）
　　服部　　勲（邑南町教育委員会課長補佐）
　　林田　知樹（邑南町教育委員会課長補佐）
　　大橋　　覚（邑南町教育委員会社会教育係長）
　　大島　吉雄（邑南町教育委員会主事）

整理作業　　市山真由美（邑南町教育委員会）

発掘作業員　　白須　静男　　白須オトメ

調査日誌抄録

2009年（平成21年）

12月11日（金）雨　過去に２度以上移築されたものと伝わる八色石経塚の現地確認と、基壇石材の重量を把握するための計測。

12月14日（月）曇り　石積遺構全体のボリュームの把握と、経塚周辺の薬師堂や西光院跡の踏査。石積遺構は高さ約１ｍ、幅約2.8ｍ×奥行き約2.6ｍ。

12月16日（水）曇りのち雪　発掘作業開始。作業員２人役。経塚周囲の樹木の伐採と除草及び石積遺構外部の除草。石積遺構上面にかなりの量の玉砂利あり。

12月24日（木）晴れ（降雪）　作業員２人役。石積遺構精査、遺構東側は既存の地形を活用したのか？石材が省略されていた。基壇正面（西側）には奥行き約１ｍの踏み段らしき石積みを確認。以後、積雪により発掘作業中断。

2010年（平成22年）

１月20日（水）晴れ　積雪状況を確認するが、積雪あり。

３月３日（水）晴れ　発掘作業再開。作業員２人役。石積遺構及び周辺の精査後、撮影。石積遺構上部よりひしね信仰のあった石材とその台座に使用した石材、また宝篋印塔の九輪や五輪塔の空風の部材、叩石または磨石の可能性のある石を検出。さらに、西光院境内跡から五輪塔の風空や宝篋印塔の相輪の部材確認。

３月18日（木）晴れ　作業員２人役。チェーンブロック等を駆使し、基壇石材の除去及び基壇内部の調査を開始。

３月22日（月）晴れ　作業員２人役。チェーンブロックにて基壇石材を除去しながら内部調査。基壇内部はおよそ１層の堆積であり、堆積土を篩い（とおし）にかけ調査した結果、多数の寛永通宝（銅銭・鉄銭）及び大正８年製の一銭が１枚出土。このことから大正年間の移築後、今日に至った遺跡であると判断した。玉砂利は基壇上面の他、内部にも大量に混在。基壇下の地表面で赤色の堆積土（焼土か？）と、土坑の平面プランを確認。

３月27日（土）曇り　作業員２人役。チェーンブロックにて基壇石材を除去しながら引き続き内部調査。

３月28日（日）晴れ　作業員0.5人役。基壇石材の除去完了。雨のため午前中のみ。

３月30日（火）晴れ　作業員１人役。経塚下の土坑の平面プランを検出、半裁し調査。土坑内部にも玉砂利が混入しており、この経塚が築造（移築）された際の土坑であることを確認。土坑の実測。

３月31日（水）曇り　作業員２人役。土坑の完掘。土坑実測・撮影。発掘作業終了。

Ⅱ．八色石経塚の位置と環境

島根県邑智郡邑南町は島根県のほぼ中央部の邑智郡南部に位置し、南西には標高600～800ｍの中国脊梁山地が連なり、山地を境として広島県と接している。平成16年10月１日に羽須美村、瑞穂町、石見町が合併し新たに誕生した町で、町域の東側が旧羽須美村、中央部が旧瑞穂町、西側が旧石見町、面積419.2ｋ㎡、人口約12,000人の中山間地域に位置する町である。

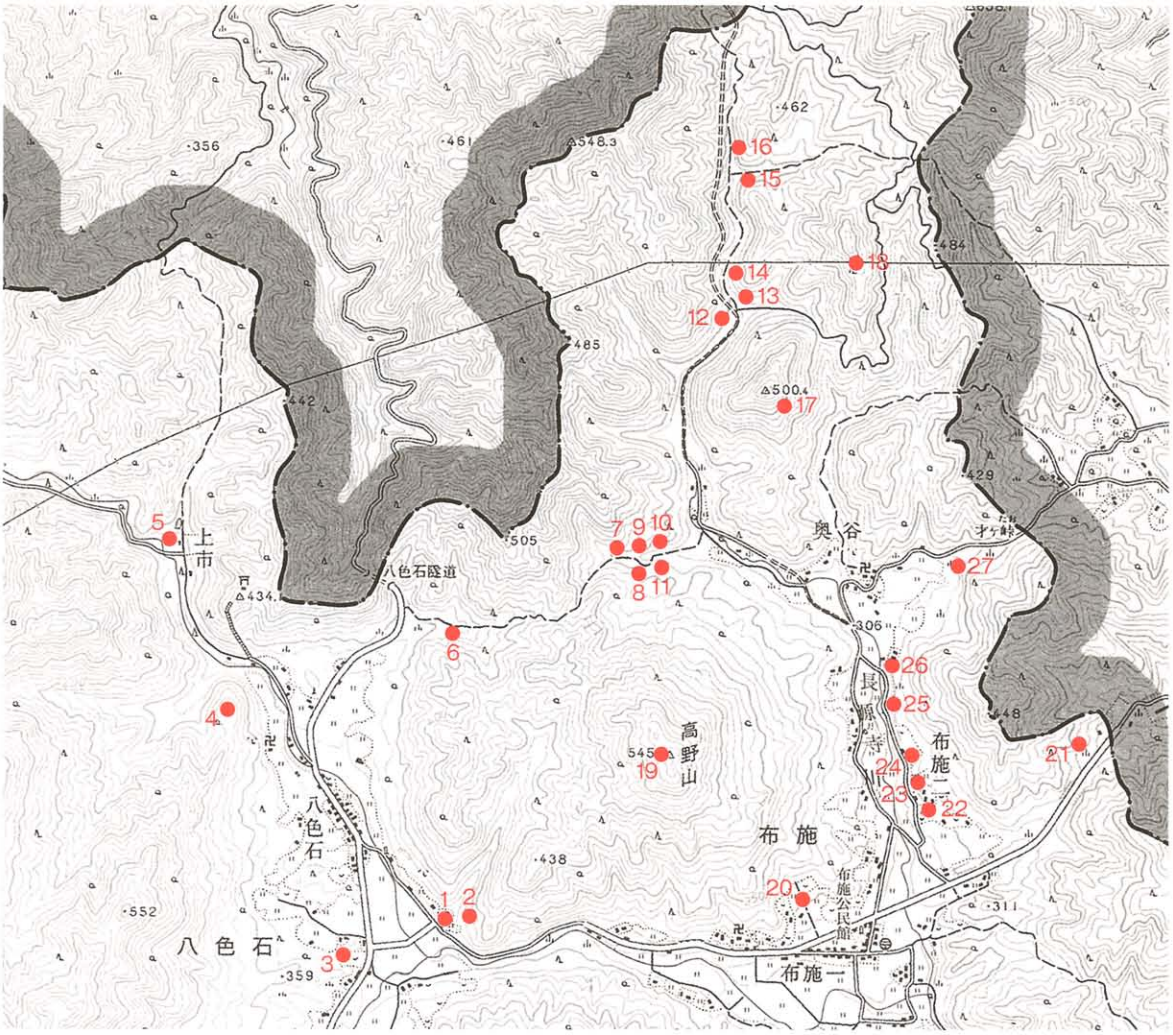
本報告書掲載の八色石経塚は旧瑞穂町地内（現邑南町瑞穂地域）八色石地区に所在する。八色石経塚は邑南町瑞穂支所から北へ約12ｋｍの布施地区境に位置する。立地は山頂に西善寺が在ったと伝えられる標高546ｍの高野山から南西に派生する尾根の端部の標高311ｍ付近の小平地に所在し、その南側を主要地方道邑南飯南線が東西に延びる。

八色石地区は瑞穂地域の最北部に位置し、川本町境の標高718ｍの高堀山周辺を源流とする角谷川が南流し、八色石経塚付近で流れを東に変え布施地域を経て江の川に合流する。角谷川流域や布施地区内の支流長源寺川沿い等には中世や近世の製鉄遺跡が多く所在する。また、西光院跡、西善寺跡などの寺院跡や銭宝城跡、赤羽城跡、長源地本谷城跡[(1)]など中世の山城も点在する。現在までに分布調査等で確認されている布施・八色石地区の遺跡は75ヶ所[(2)]で、内訳は今回調査を実施した経塚１ヶ所、製鉄関係遺跡56ヶ所、山城跡３ヶ所、古墳２ヶ所、寺院跡３ヶ所、神社跡２ヶ所、古墓３ヶ所、散布地４ヶ所、瓦窯跡１ヶ所である。

註

(1) 瑞穂町教育委員会『長源地本谷城発掘調査報告書』1997年２月
(2) 瑞穂町教育委員会『瑞穂町内遺跡分布図Ⅴ－布施・八色石地区－』
その他『瑞穂町誌』第１集（1964年）、第２集（1996年）、第３集（1976年）による。

第１図　邑南町域と八色石経塚位置図



第２図　八色石経塚付近遺跡分布図

1．八色石経塚　2．西光院跡　3．古酒屋セド鍛冶屋跡
4．銭宝城跡　5．上市鈩跡　6．八色石銭宝谷鈩跡
7．布施銭宝谷１号鈩跡　8．布施銭宝谷３号鈩跡　9．布施銭宝谷５号鈩跡
10．布施銭宝谷４号鈩跡　11．布施銭宝谷２号鈩跡　12．長源地２号鈩跡
13．長源地３号鈩跡　14．長源地大鍛冶跡　15．長源地５号鈩跡
16．長源地遺跡　17．赤羽城跡　18．長源地本谷城跡
19．西善寺跡　20．森田大鍛冶跡　21．大原峠古墳
22．岡製鉄遺跡　23．鈩ヶ原鈩跡　24．小フケ瓦窯跡
25．鍛冶屋野鍛冶跡　26．鍛冶屋古墓　27．別当大鍛冶屋跡

Ⅲ．調査の概要と出土遺物

八色石経塚は、邑南町八色石714番地４に所在する。主要地方道邑南飯南線道路改良工事の影響を受けることが明らかになり調査を実施したものである。

以下、調査の概要を報告する。

１．経塚について（第４図、図版第１ａ～５ｂ）

1992年に実施した布施・八色石地域遺跡分布調査の際の記録写真をもとに、発掘調査着手前の経塚を観察すると、経塚中心部に当時建てられていた自然石２個が西側に向け倒れていた。この自然石は「ひしね地蔵[1]」とよばれ、中心部の扁平な50cm×40cm、厚さ10cmの川原石はその台座と考えられる。分布調査当時確認されていた五輪塔の空輪・風輪部も元位置ではあったが「ひしね地蔵」同様西側に倒れていた。それ以外は分布調査時から改変された所は認められなかった。

さて、発掘調査はまず、経塚やその周辺の除草や掃除を実施し、三次元測量や記録写真撮影ののち石材を外しながら経塚内部の調査を実施した。概要は次の通りである。

経塚は地面を整地しその上に築かれているが、全体を同レベルに整地したのではなく自然地形をそのまま利用し、東側を約80cm高く盛土している。石積遺構の平面形は方形であるが南側は石組が崩れている。石積は石を水平に積み上げる布積で、西側、北側が２段、東側が１段、南側は崩落しているが２段であったと考えられる。上段の水平を保つため、下段と上段の石の隙間に20～30cm大の石を詰め調整している。

経塚の平面形は方形で下段西側（Ａ－Ａ′）2.9m、北側（Ｂ－Ｂ′）2.6m、東側（Ｃ－Ｃ′）3.2m、南側（Ｄ－Ｄ′）2.8m、上段西側2.7m、北側2.4m、東側3.0m、南側2.6mである。石材の大きさはおおよそ長辺60～90cm　短辺50～60cm　厚さ30～65cmで各石材は加工されているが企画性はない。高さは約１mである。経塚上面には円礫が10cm程度の厚さに敷かれている。

経塚上面のほぼ中央部に、南北に約1.3m、東西に約1.5mの方形の基礎状に長辺約30～60cm、短辺約25～30cm大の加工された石材が並べられ、内側に石積同様厚さ10cm程度敷かれている。

経塚の埋土は暗褐色土で土中に円礫や寛永通宝等の銭貨が混入していたが、埋納の器や施設は設けられていない。

また、経塚から約40cm前側に40～70cm大の石６個と10～20cm大の10数個が約1.8mの長さに乱雑に並べられている。参拝等の踏み段と推測され、西側が本遺構の正面と考えられる。

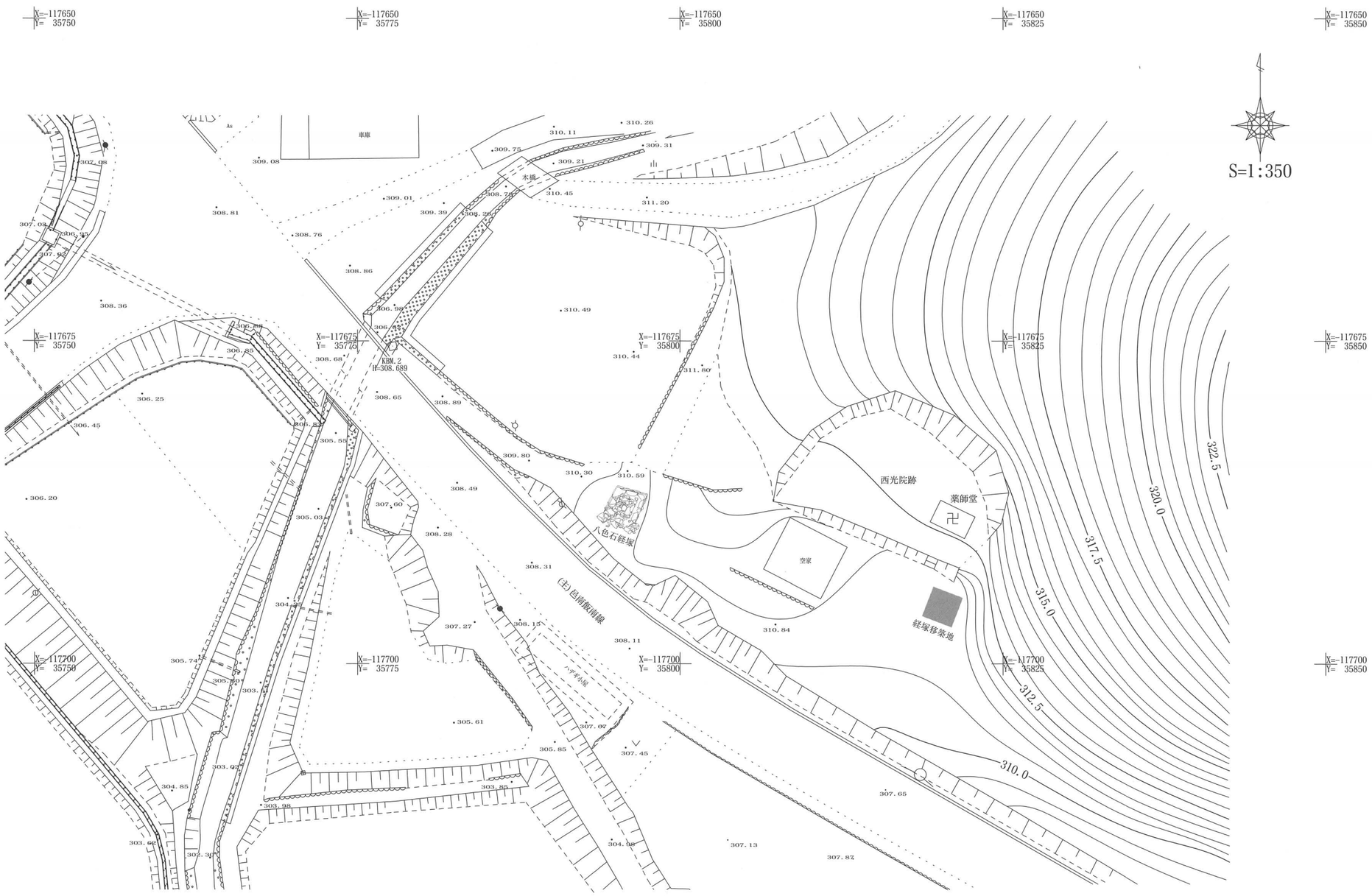
２．土坑について（第５、６図、図版第６ｃ～７ｃ）

土坑は経塚の下層から検出されており、位置は中央部から僅かに東寄である。平面形はやや崩れた楕円形で長軸2.1m、短軸1.7m、深さ55cmである。

埋土は経塚内部と同様黒褐色が主で、石積遺構上面や埋土から検出された礫と同様の川石が混入していることから、経塚構築時に掘られたものであると考えられるが性格は不明である。

３．出土遺物について

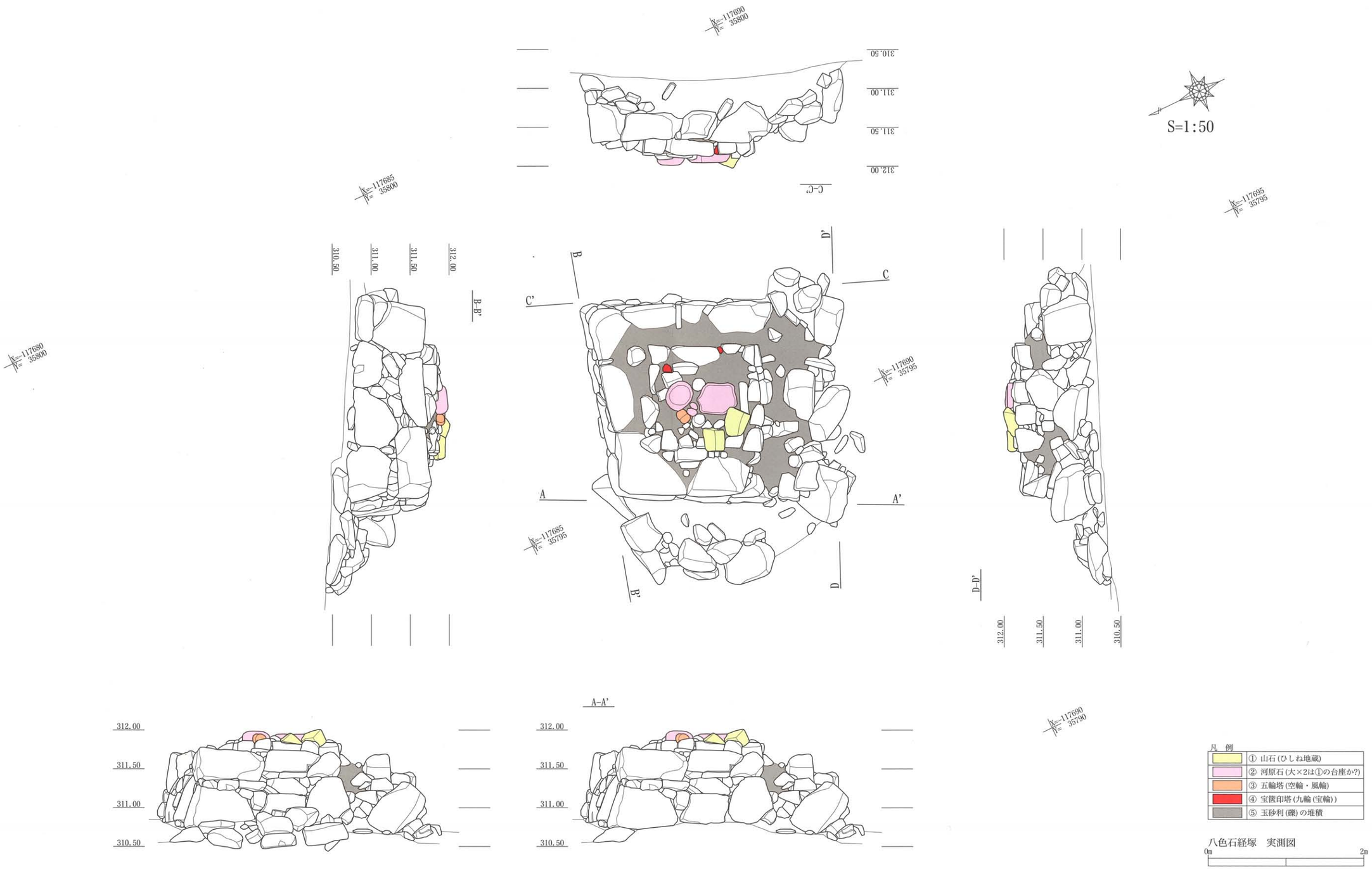
出土遺物は大量の小礫と銭貨と経塚遺構上で五輪塔の空輪・風輪部と宝篋印塔の九輪部等の他、縄文土器と思われる小片１、近年の陶磁器や化粧瓶なども出土している（図化省略）。



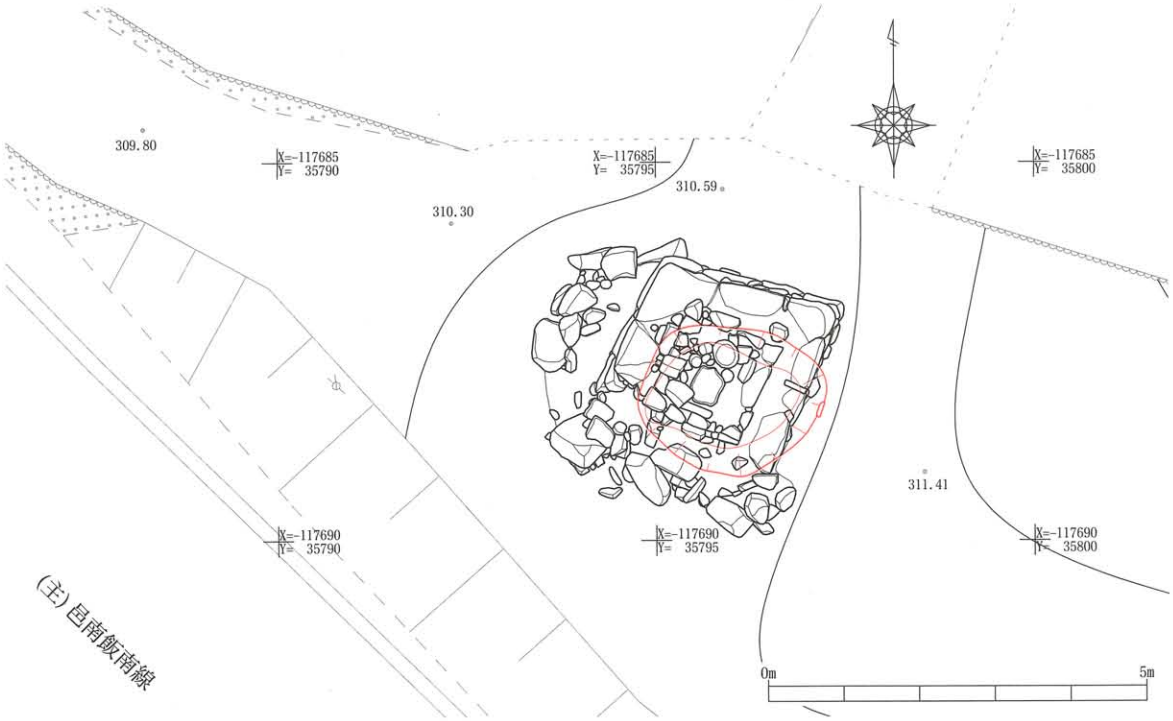
八色石経塚 地形平面図(調査前)

0m 10m 20m

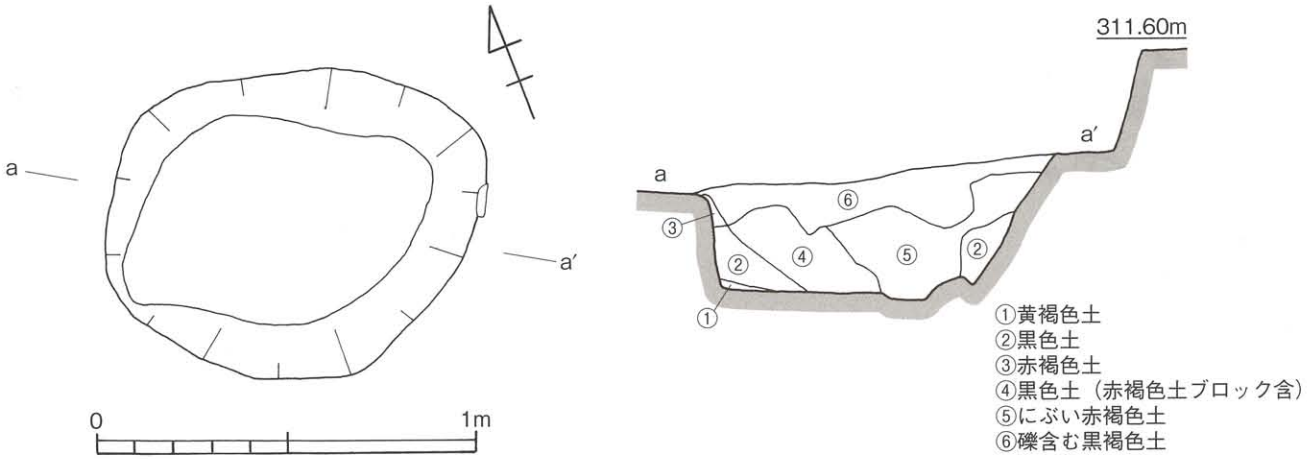
第３図　八色石経塚周辺地形測量図



第４図　八色石経塚実測図



第５図　土坑配置図



第６図　土坑実測図

経石（第７図、図版第８ａ）

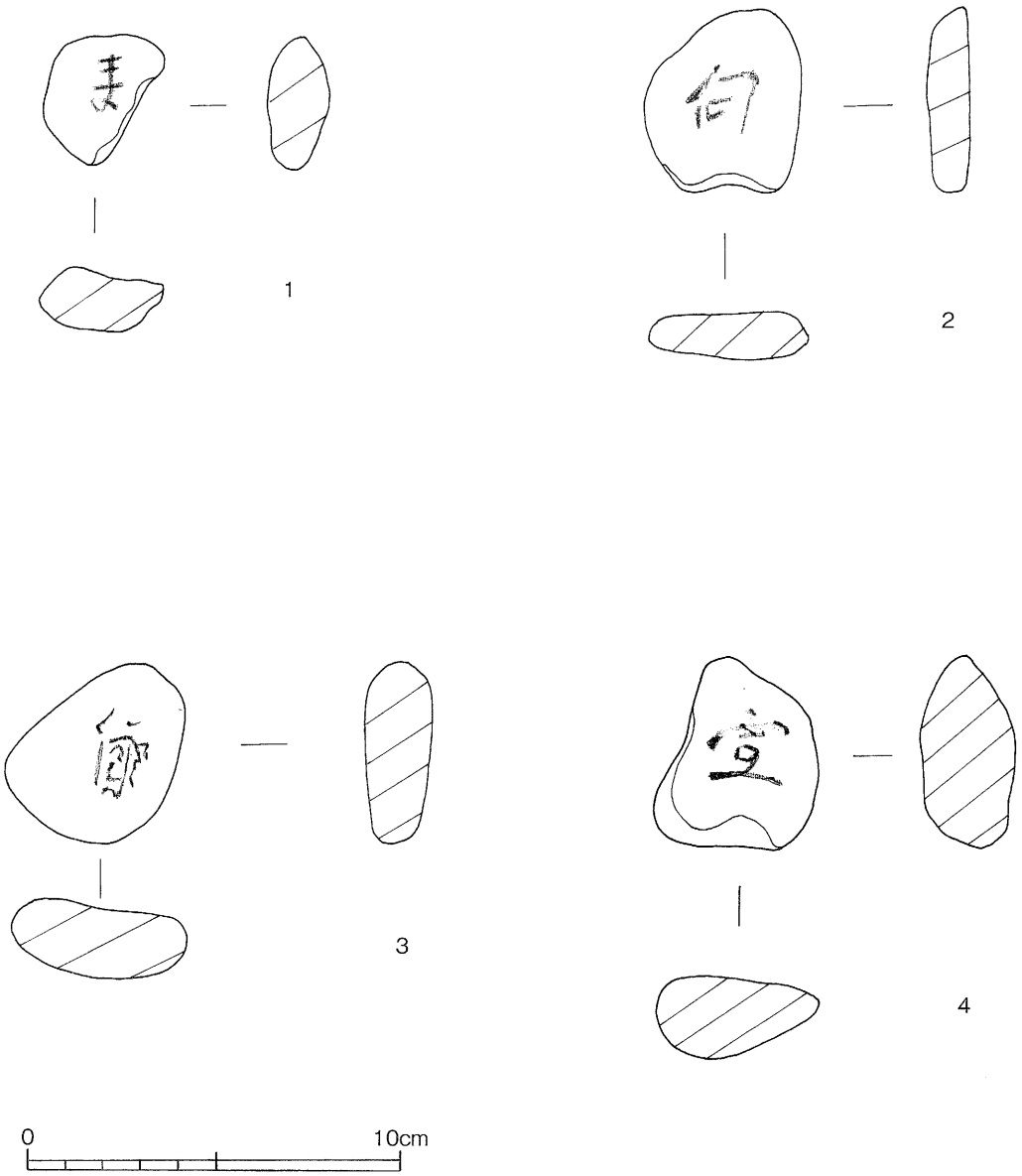
小礫は約４×4cm大のものが大半を占める。川石で加工されたものはなく、色調は淡茶色や濃茶色のものが多い。遺構上面や埋土の中から出土した。出土総数は約21,000点である。そのほとんどに墨書の痕跡が認められないが、目視で墨書の可能性があるものが21点あった。それらを赤外線により調査した結果、その内４点で墨書が認められたが、判読できるのは「宣」１点であり、経文名は不明である。

銭貨（第８図、図版５ｃ、８ｂ～９ａ）

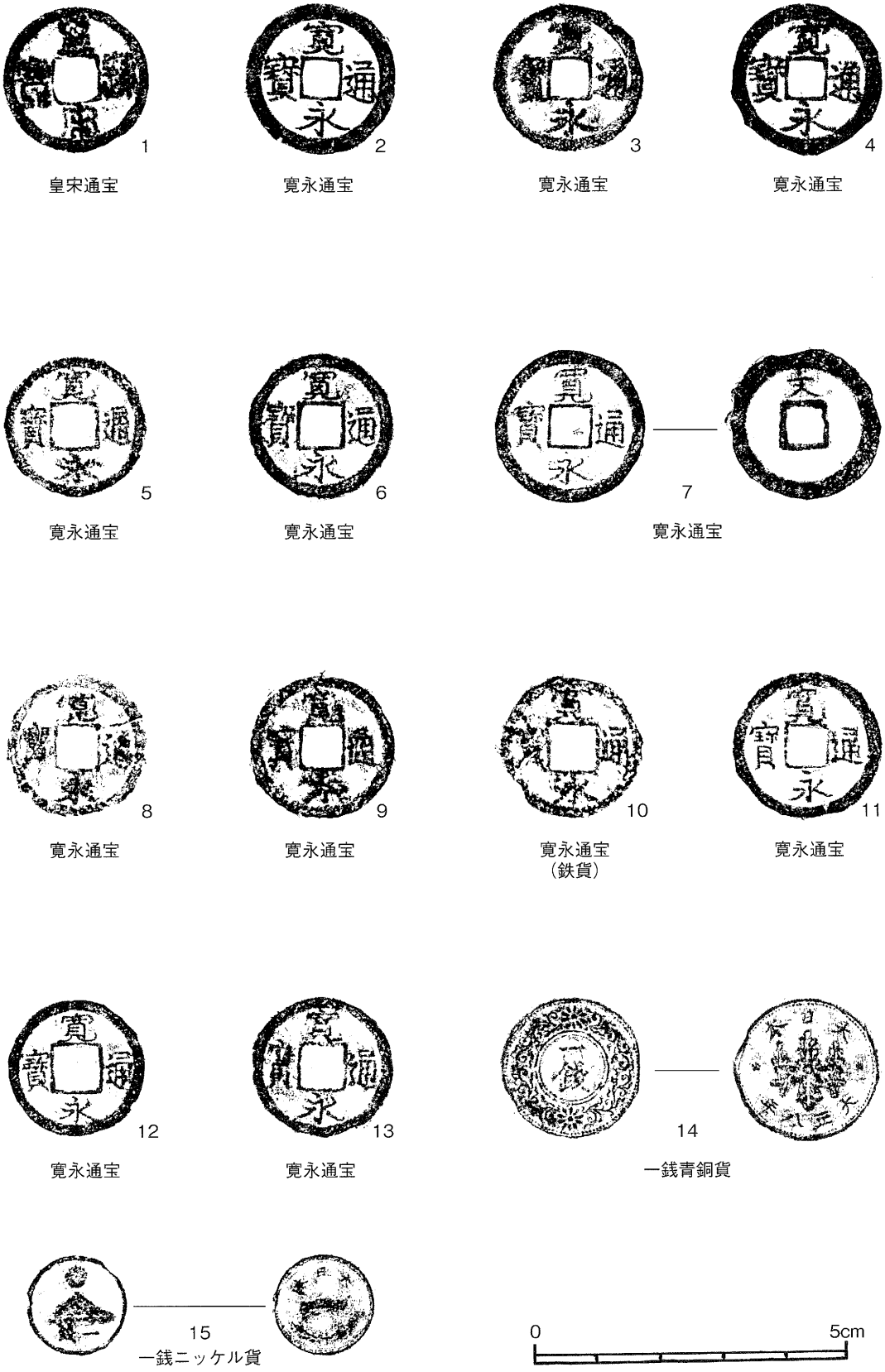
銭貨は銅貨13枚、鉄貨21枚、ニッケル貨１枚出土している。ほとんどは経塚内の埋土中から出土しているがニッケル貨は経塚上面から出土している。内訳は宋銭１枚、寛永通宝10枚、大正８年製

の一銭青銅貨、昭和16年製一銭ニッケル貨がそれぞれ１枚であるが、鉄貨については拓影10を除いて錆により腐食が進み不明である。

宋銭は皇宋通宝で直径24mm、厚さ２mmで11世紀頃のものである。寛永通宝は字体や大きさ、裏面の文様や文字等により鋳造年代が異なり、図化した寛永通宝も特徴により鋳造時期が異なる。概ね17世紀前半期のものから18世紀中頃までのものが出土している。鉄貨は18世紀後半以降のものと考えられる[(2)]。



第７図　経石実測図


1
皇宋通宝
2
寛永通宝
3
寛永通宝
4
寛永通宝
5
寛永通宝
6
寛永通宝
7
寛永通宝
8
寛永通宝
9
寛永通宝
10
寛永通宝
（鉄貨）
11
寛永通宝
12
寛永通宝
13
寛永通宝
14
一銭青銅貨
15
一銭ニッケル貨
0
5cm

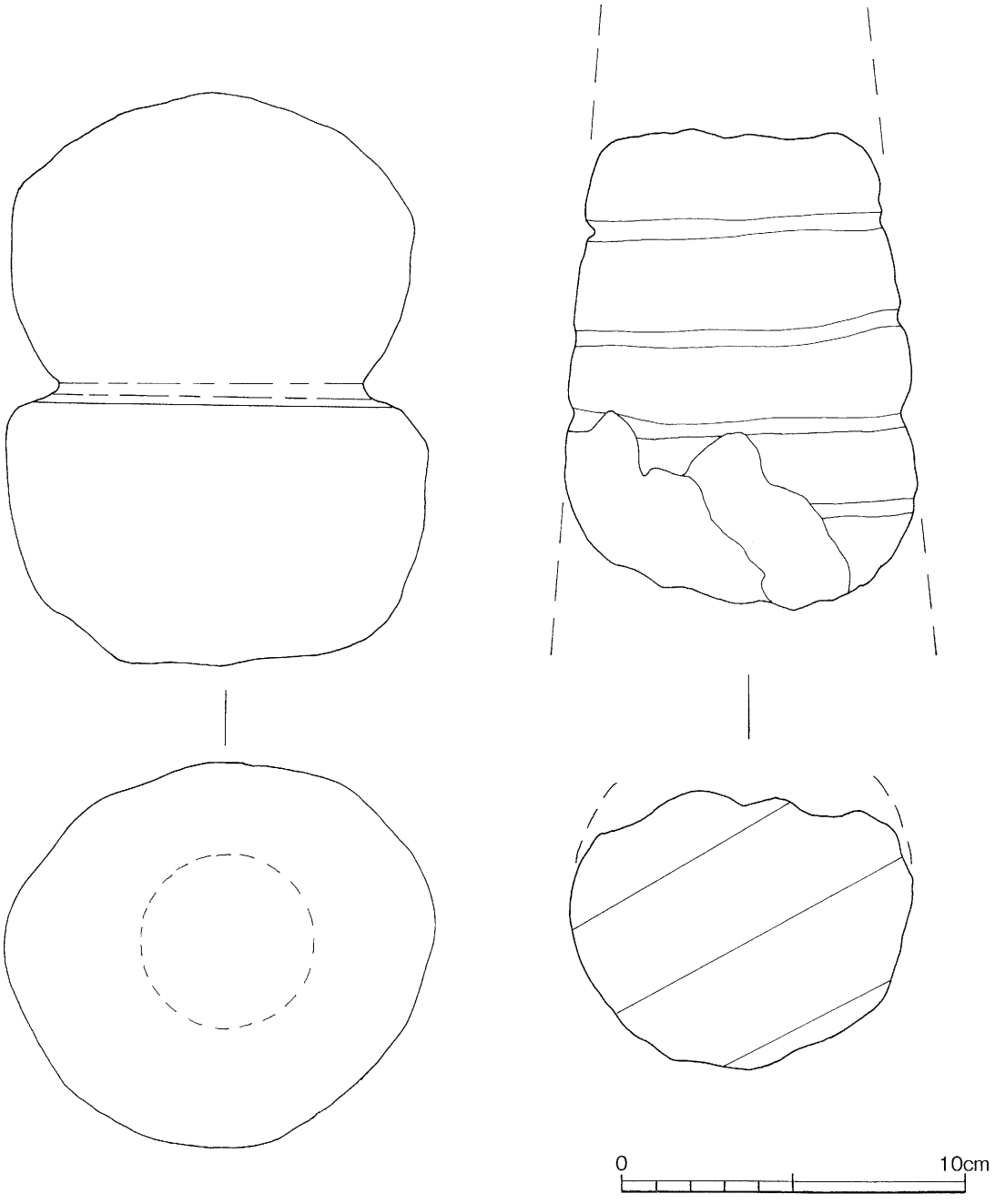
第８図　銭貨拓影

五輪石（第９図、図版第９ｂ）

経塚上面の基礎状遺構内に倒れた状態で検出された。出土したのは五輪塔の空輪、風輪部分で火輪以下は出土していない。空輪部と風輪部は一つの石材を加工して作られており、高さは16.6cmで中央より少し下でくびれ状に彫り込み、空輪と風輪に分かれる。空輪部の大きさは高さ8.5cm、最大径11.6cmである。風輪部の高さは8.1cmで最大径は12.3cmである。梵字等の掘込みは無い。制作は15世紀頃と考えられる。

宝篋印塔（第９図、図版第９ｃ）

五輪塔同様基礎状遺構内で検出された。検出されたのは相輪の九輪部分である。２個検出されたが１個体分である。九輪部分は彫りも浅く雑で、残存高14.0cm、復元直径14.1cmある。



第９図　五輪石（空・風輪部）、宝篋印塔（相輪部）実測図

宝珠、請花は欠損しており、塔身や基礎は出土していない。五輪石同様15世紀頃の作と考えられる。

使用痕のある石（第10図、図版第10ａ）

１、２は使用痕のある石で経塚上面で検出された。１は長さ14.4cm、幅9.5cm、厚さ5.4cmである。２は長さ10.9cm、幅7.5cm、厚さ4.9cmである。１、２とも磨石と考えられる。

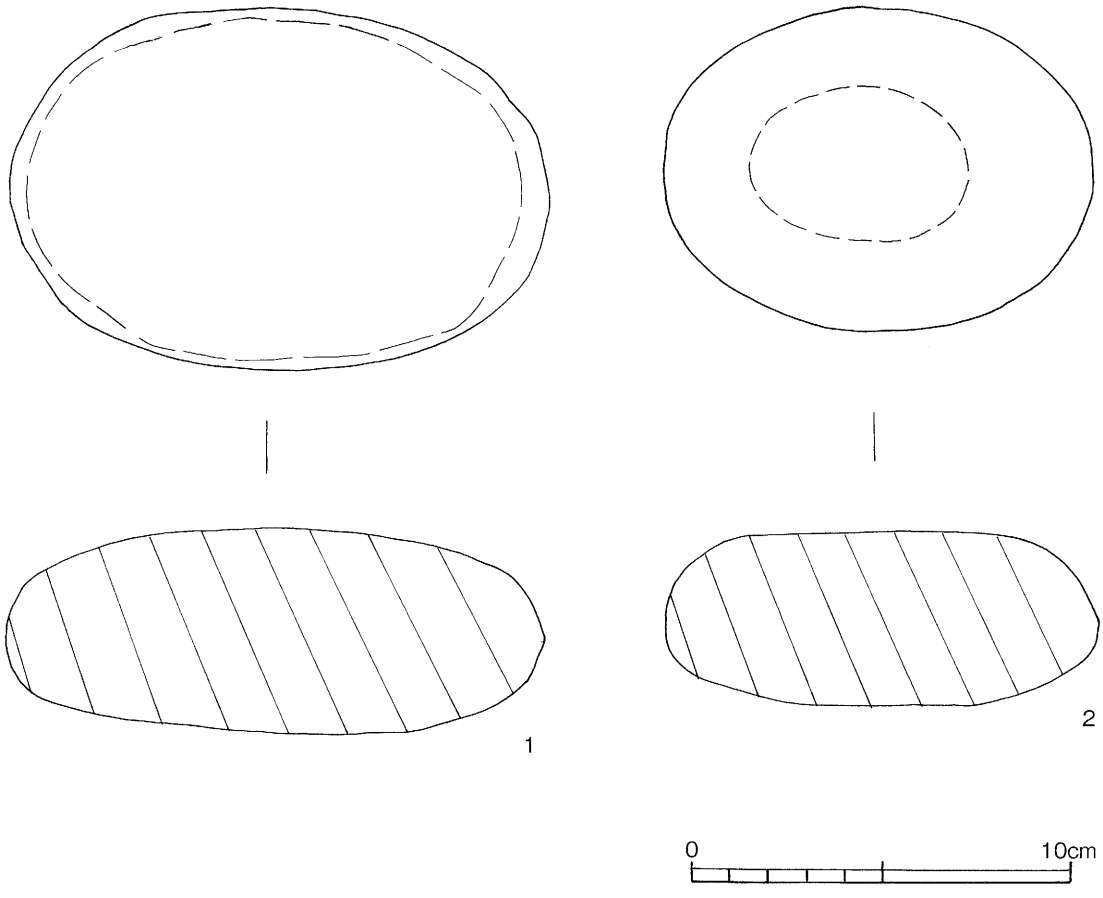
ひしね地蔵（第11図、図版第10ｂ、ｃ）

「ひしね地蔵」と伝えられる自然石が２個、経塚のほぼ中央に置かれている。大きさはそれぞれ高さ28cm、幅23cmと高さ36cm、幅29cmで断面三角形である。彫刻等なされていないので、当初から地蔵として信仰を集めていたか否かは不明である。

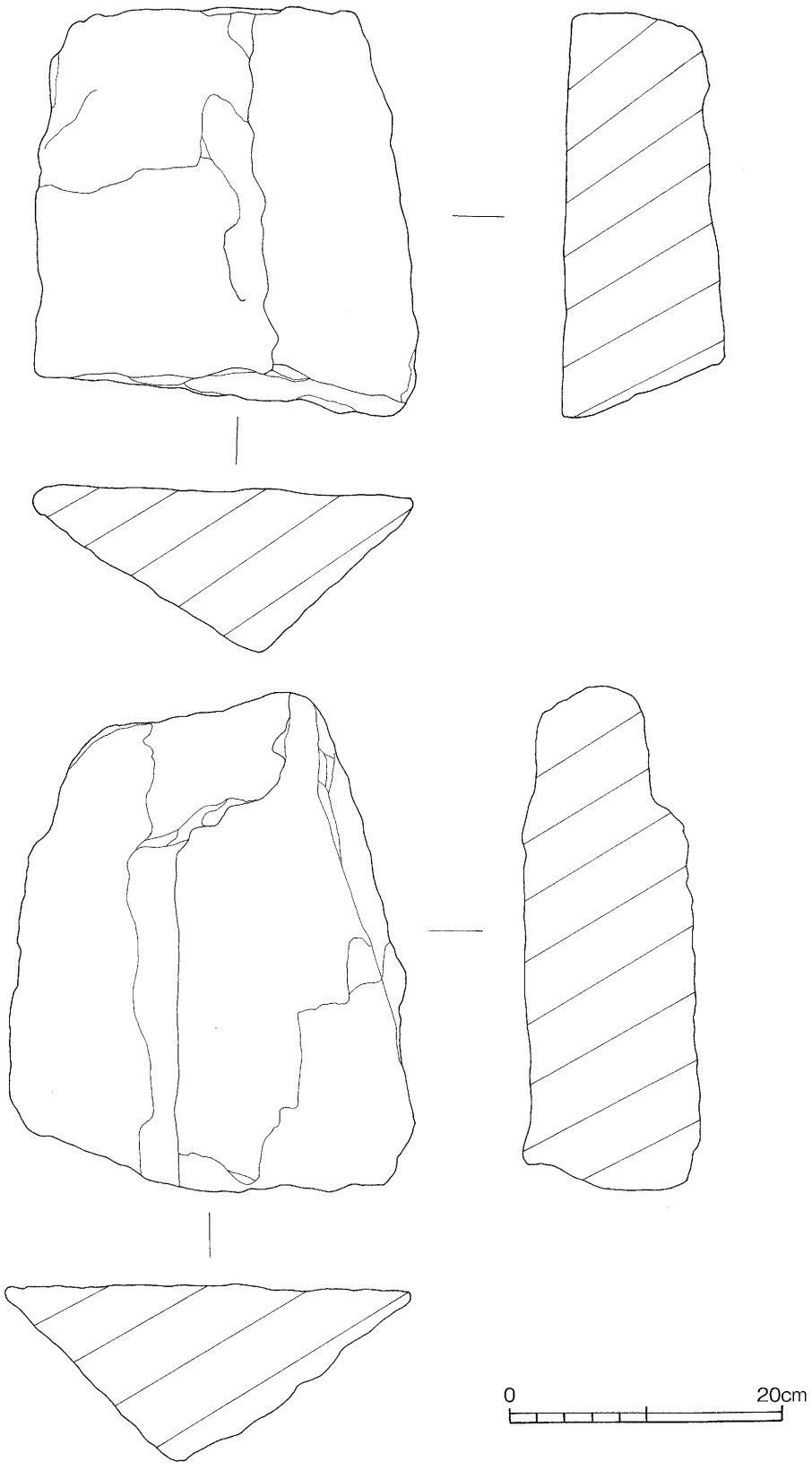
西光院跡より採集した遺物（第12図、図版第11ａ、ｂ）

経塚から北東約20mに位置する西光院跡境内地から採集した宝篋印塔相輪部と五輪石の空輪、風輪部である。相輪部か高さ48．５cm、最大径15.4cmである。九輪も溝が無く突帯が２条あるが、上下請花省略されている。時代は16～17世と考えられる。石材は福光石である。

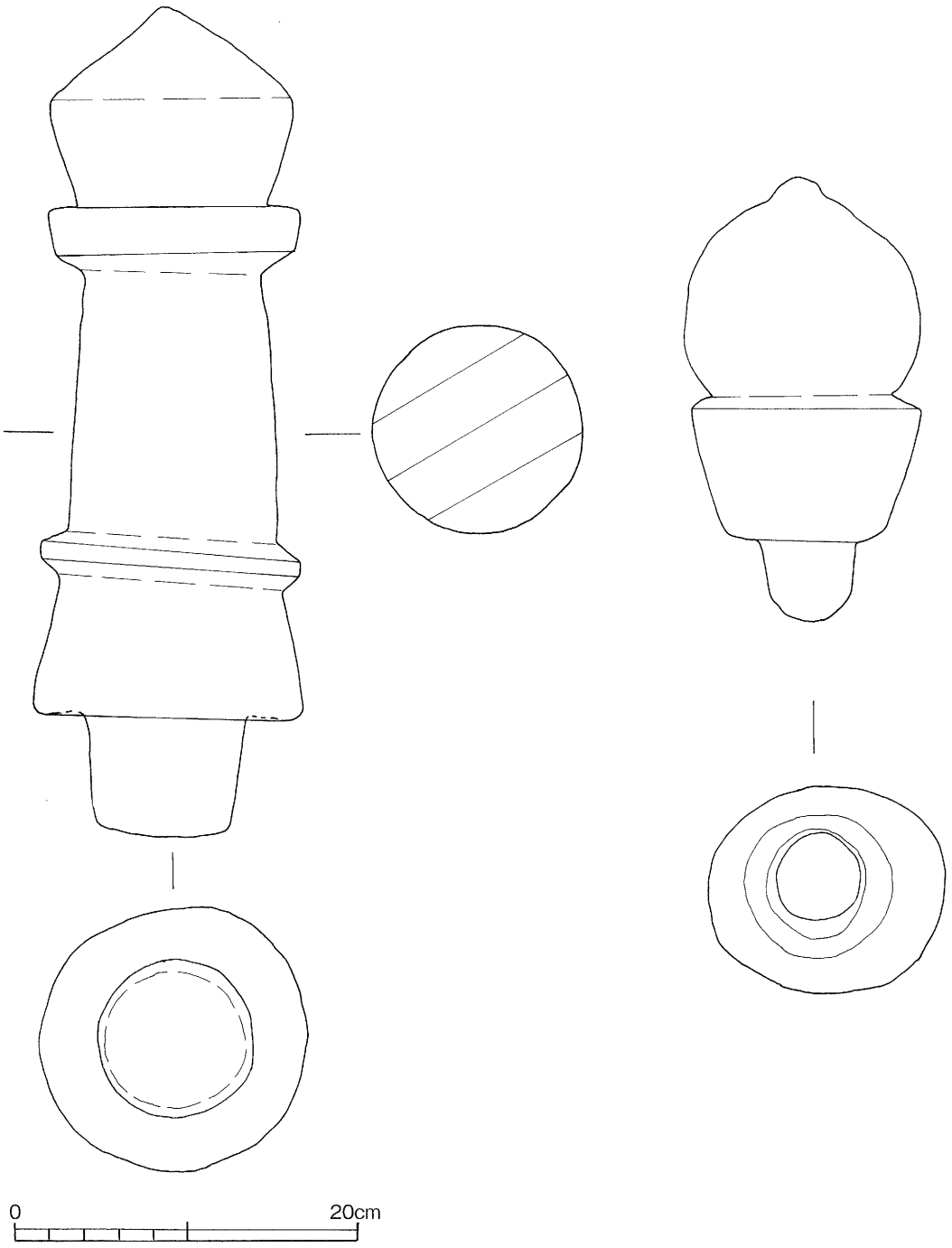
五輪塔は空輪、風輪部分で、空輪部と風輪部は一つの石材を加工して作られており、高さは21.0cmで茎を含む高さは25.9cmである。中央より少し下でくびれ状に彫り込み、空輪と風輪に分かれる。空輪部は高さ12.6cm、最大径13.8cmである。風輪部の高さは8.5cmで最大径は13.4cmである。梵字等の掘込みは無い。15世紀頃のものか。



第10図　使用痕のある石実測図



第11図　ひしね地蔵実測図



第12図　西光院跡より採集した遺物実測図（宝篋印塔相輪部・五輪石空風輪部）

註

(1)「ひしね」は当地方の方言で、手や足等にできるイボのことで皮膚病の一種である。この「ひしね」治療のために祀られた「ひしね地蔵」は今も町内各地で祀られている。

(2)『日本貨幣カタログ2009年版』日本貨幣商協同組合　平成20年11月12日42版

※五輪石、宝篋印塔の年代観については、島根県文化財課世界遺産室守岡正司氏のご教示による。

Ⅳ. まとめ

今回の邑智郡邑南町八色石における八色石経塚の発掘調査は、邑南町での経塚の発掘調査としては初めてのことであり、邑智郡内でも谷戸経塚[1]（川本町）、木谷石塔[2]（同）につづいて３例目の調査であった。

以下調査によって得られた成果の概要についてまとめておきたい。なお、経塚は関係者の努力により調査後元位置から約20m南東側に移築復元することとなった。

１．経塚について

八色石経塚は四方が2.6～3.2m、高さが約１mの方形壇状の石積の上部中央に四方が1.3～1.5mの方形に石を組んでいる。その上に「ひしね地蔵」とよばれる高さ28～36cmの自然石２個とその周辺に五輪塔や宝篋印塔の一部を置いている。一見すると「ひしね地蔵」と方形壇状の石積との釣り合いが取れていないと感じる。谷戸経塚の例では、石積の上に高さ1.5m、幅0.4～0.8m、厚さ0.2mの自然石に碑文が刻印されており、八色石経塚にもそのような石碑があったのではないかと想像できる。

さて、八色石経塚については、記録が無く建立年代や経緯については不明であるが、地元に口碑が伝えられている。それによると、「明治年間に道路改良で支障になるので、現場所に移築した。移築の時お経を記した小礫が多量に出た。」「お経塚を３mばかり移動した時、小石にお経が書かれていたのが読めた。」とあるが移築されたか否かは不明であった。今回の調査により小礫に経文と思われる墨書も確認され、一字一石の経塚であることが確認できた。また前述した口碑でも移築されたとされており、調査に於いても、石積遺構内埋土中より宋銭や寛永通宝などとともに大正８年製の一銭銅貨が出土していることから、少なくとも大正８年以降１回は移築されたことが明らかとなった。口碑では明治年間に移築されたと伝えられており、複数回の移築があった可能性も否定できない。

２．建立時期について

仏教の考え方に、釈迦入滅後正法、像法、末法という三時期があり、末法の時期を経て釈迦の教えが失われるとされ、日本では1052（永承７）年に末法が始まると信じられていた。末法が近接すると教典等が消滅する危機意識があり、教典を埋納して後世に伝えるため経塚を作ったのが始まりとされている[3]。

八色石経塚のように、経文一字を一石に書くいわゆる一字一石経を土中に埋める一字一石経塚が出現するのは中世末から近世にかけてである。

邑智郡内で確認されている経塚は八色石経塚の他、宗林寺経塚（邑南町）、谷戸経塚（川本）、仙岩寺鳳瑞比丘経塚[4]、（同）、妙船寺境内経塚[5]（同）、木谷経塚（同）等がある。谷戸経塚、仙岩寺鳳瑞比丘経塚、妙船寺境内経塚は碑銘によりそれぞれ1819（文政２）年、1737（元文２）年、1849（嘉永２）年の建立であることが判明しており、木谷経塚は発掘調査で出土した経石の墨書から1778（安永７）年に建立されたことが確認されている。

八色石経塚の建立年代を考える上で隣接する川本町の経塚の建立年代や、埋土中から出土した銭

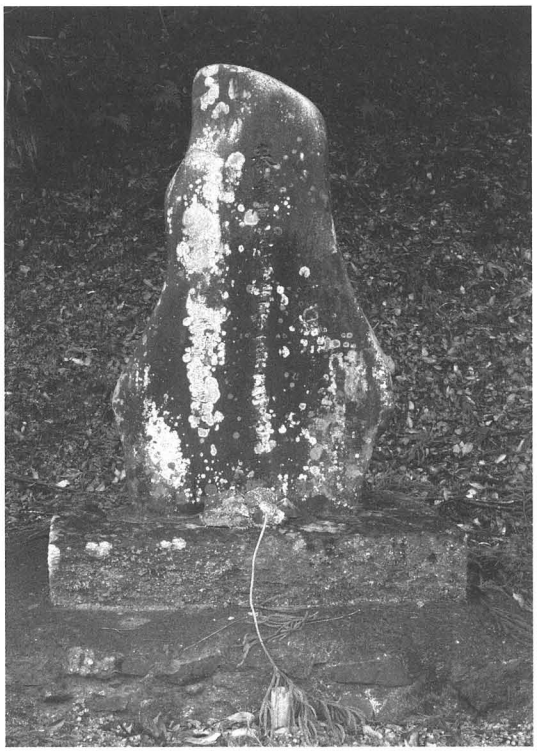
貨が上げられる。１枚出土した宋銭は鋳造年代が11世紀頃のもので一字一石経塚が出現する前のものであり、また出土数が１枚であることなどから、直接の建立年代の根拠にはならない。最も多く出土した寛永通宝は寛永13（1636）年に初鋳されて以降江戸時代を通じて広く流通しているが、出土した寛永通宝から18～19世紀頃の建立と考えられる。

３．石見部の経塚の分布と信仰について（第１表）

現在石見部で確認されている経塚は46ヶ所以上で、宝篋印塔等の石塔や、石碑であったり礫石積であったり形態も様々である。分布は、石見部中部以西の浄土真宗や禅宗等の混在する地域や浄土真宗以外の宗派が盛んな地域の分布が密で、浄土真宗が盛んな石見部東部の分布は疎である。

郡内の経塚を見ると、仙岩寺鳳瑞比丘経塚、妙船寺境内経塚、宗林寺経塚（消滅）はそれぞれ曹洞宗、日蓮宗、臨済宗の境内に建立され、谷戸経塚は法華経を、木谷経塚は宝篋印陀羅尼経を埋納しており、浄土真宗の関与は認められない。

布施、八色石地区にはそれぞれに浄土真宗寺院があり、年間を通じて浄土真宗行事が行われ、寺と地域の住民は門信徒として固い絆で結ばれていたが、八色石経塚にこれら寺院が関わることは無かったであろう。八色石経塚は八色石地区と布施地区の境付近に位置し、経塚に近接して西光院と呼ばれる寺院跡や薬師堂が所在し、付近には五輪塔や宝篋印塔が点在する。また、経塚横の谷の奥は地獄谷と呼ばれ、宗教色の強い場所である。八色石経塚建立に西光院や薬師堂が関与したかは不明であるが、地元浄土真宗寺院が小規模集団や個人の神仏信仰まで、関与したとは考えられず、小規模集団や個人レベルの除災や現世利益等を望む素朴な信仰が経塚や路傍の石仏等に向けられ、地元の人々が経塚に参集し除災や極楽往生、追善供養等の加持祈祷や先祖供養を行ったのではなかろうか。そこに宗教の二重構造を見てとれると言えそうである。



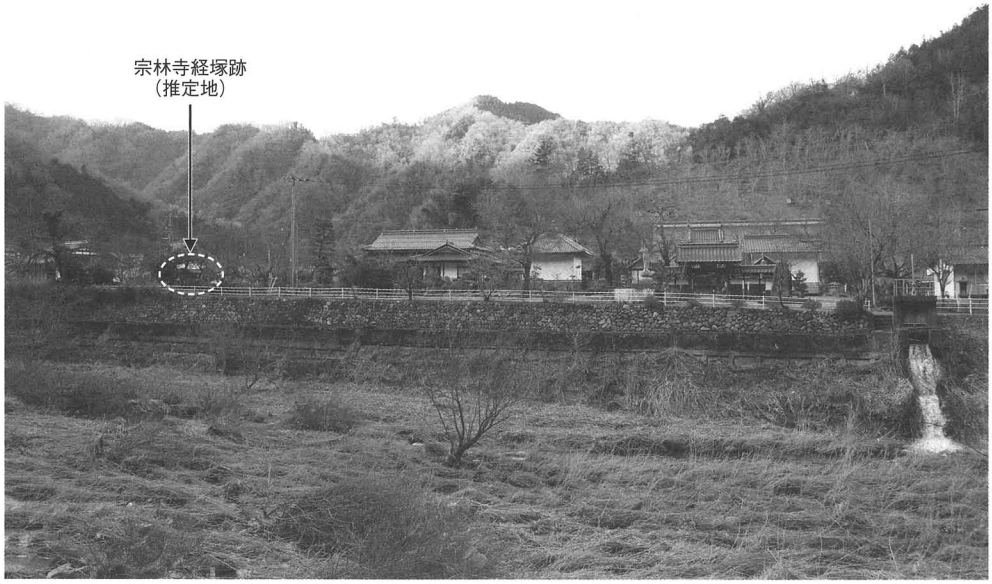
谷戸経塚全景写真

４．ひしね地蔵について

自然石２個が「ひしね地蔵」と伝えられている。今日布施・八色石地区で確認されている石仏等は15ヶ所であるが、その中に「ひしね地蔵」は無く、『元布施村の史誌[6]』の中にも所収されていない。また、平成９年に民俗学研究グループ「古々路の会」の聞き取り調査[7]でも、「ひしね地蔵」の存在は地元でも認識されている様子は見受けられなかった。これらのことから地域の人々の信仰を広く集めていたというよりは、個人単位での信仰が行われていたのかもしれない。本来は石積遺講上に石碑または石塔の様なものが置かれていたのであろうが、何らかの事情で失われ、その代わりに置かれた自然石が何時の時代か「ひしね地蔵」として個人単位の信仰を集めた可能性を指摘しておきたい。

註

(1) 川本町教育委員会『谷戸経塚・木谷石塔発掘調査報告書』昭和62年３月
(2) 前掲註(1)
(3) 田中琢・佐原真編『日本考古学事典』（株）三省堂　2002年５月
(4) 前掲註(1)
(5) 前掲註(1)
(6) 漆谷茂樹編『元布施村史誌』元布施村史誌刊行会　昭和47年７月
(7) 森　隆男「路傍の石仏等が語るもの」『昔風當世風-島根県邑智郡瑞穂町布施・八色石地区合同調査特集-』古々路の会　平成９年12月１日



邑南町下口羽　宗林寺経塚跡推定地（南東から）

第１表　島根県石見部の経塚

番号	名称	所在地	概要
1	八色石経塚	邑智郡邑南町八色石	石積、銭貨、一字一石経塚
2	宗林寺経塚	邑智郡邑南町下口羽土居	境内地より一字一石経出土 消滅
3	谷戸経塚	邑智郡川本町谷戸	石積、一字一石経塚、文政２年建立
4	仙岩寺鳳瑞比丘経塚	邑智郡川本町谷戸	一字一石経塚、元文２年建立
5	妙船寺境内経塚	邑智郡川本町川本	一字一石経塚、嘉永２年建立
6	木谷経塚	邑智郡川本町木谷	一字一石経塚、安永７年建立
7	志学経塚	大田市三瓶町志学	
8	川上氏裏経塚	江津市跡市町	一字一石経塚
9	寺段経塚	江津市渡津町塩田	
10	嘉久志経塚	江津市嘉久志町	
11	伊甘経塚	浜田市上府伊甘	
12	多陀寺経塚	浜田市生湯町	銅製経筒
13	原経塚	浜田市西村町原	
14	京山経塚	浜田市旭町京の山	２基
15	坂本経塚	浜田市旭町坂本	
16	天代遺跡	浜田市旭町中部	
17	来尾経塚	浜田市旭町市木来尾	
18	千年比丘遺跡	浜田市金城町長田	一辺３ｍの方形川石積
19	堂原経塚	浜田市金城町追原	
20	二反田経塚	浜田市金城町下来原	川石積
21	徳田経塚	浜田市金城町小国	
22	寿昌寺経塚	浜田市三隅町黒沢郷	
23	木都賀経塚	浜田市弥栄町来都賀	円塚　壷
24	大前上経塚	浜田市弥栄町栃木大前上	円塚、宝篋印塔片
25	北ノ平経塚	益田市遠田町神明	礫石経塚
26	水分経塚	益田市水分町多田	礫石経塚
27	水分A経塚	益田市水分町	一字一石経塚、隅丸方形土坑、古銭他
28	石塔寺権現経塚	益田市横田町	陶製経筒５口平安時代末～鎌倉時代初期
29	丸茂上経塚	益田市美都町丸茂	
30	久木経塚	益田市美都町小原久木	１ｍ程度の礫石積
31	葛根薮経塚	益田市美都町都茂葛根薮	弘化４年建立
32	丸茂安養地峠経塚	益田市美都町丸茂	文政９年建立
33	笹倉八幡宮境内経塚	益田市美都町笹倉	文政６年建立
34	七面山経塚	益田市美都町丸茂	１ｍ×１ｍ　一字一石経　消滅
35	丸子山遺跡	益田市美都町宇津川	４ｍ×４ｍの集積遺構、銭貨出土
36	内石経塚	益田市匹見町上内石	石積
37	一字一石塔	鹿足郡津和野町日原片山	一字一石経塚、宝篋印塔
38	塔ノ峠経塚	鹿足郡津和野町日原枕瀬	中世
39	仏ケ垰経塚	鹿足郡津和野町日原枕瀬	経塚、宝篋印塔
40	六日市経塚	鹿足郡吉賀町六日市観音山	宝篋印塔、享保５年建立
41	七日市経塚	鹿足郡吉賀町真田山根	
42	七村経塚	鹿足郡吉賀町真田七村	
43	馬船経塚	鹿足郡吉賀町田野原金山谷	
44	馬塚経塚	鹿足郡吉賀町田野原金山谷	
45	千人塚経塚	鹿足郡吉賀町田野原柏谷	
46	指月経塚	鹿足郡吉賀町沢田	一字一石経

註
経塚の所在については、『島根県遺跡図Ⅱ（石見編）島根県教育委員会2002年３月』に加筆した。
なお、益田市美都町所在の経塚については、益田市教育委員会大野芳典氏のご教示を得た。

図　　版

図版第１

a．平成３年分布調査時
写真（北西から）

b．同（同）

c．調査前遠景
（南西から）

図版第 2

a．調査前近景
（北西から）

b．同（南東から）

c．石積（北西から）

図版第３

a．経塚（北東から）

b．同（東から）

c．同（南東から）

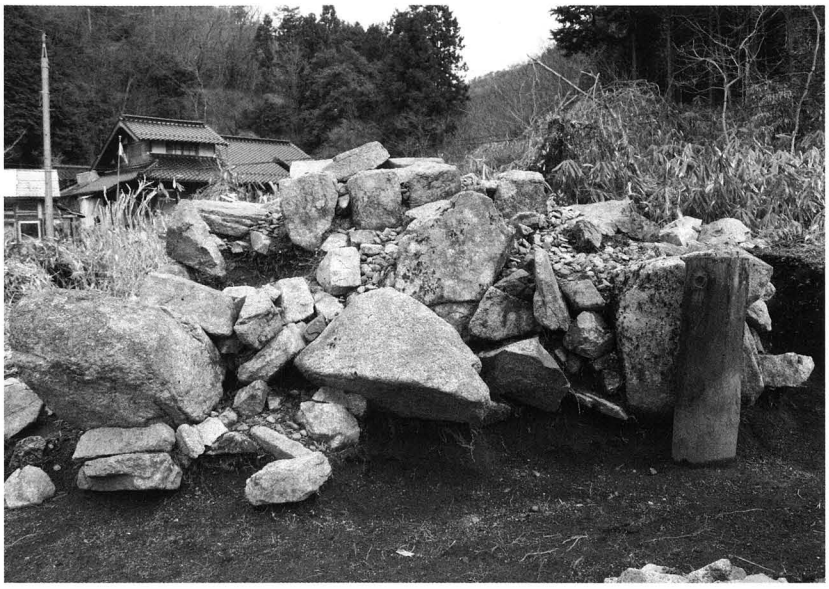
図版第４

a．経塚南側（北西から）

b．同北側（北東から）

c．同東側（東から）

図版第5



a．経塚南側（南から）

b．経塚と踏み段
（北から）

c．銭貨出土状況

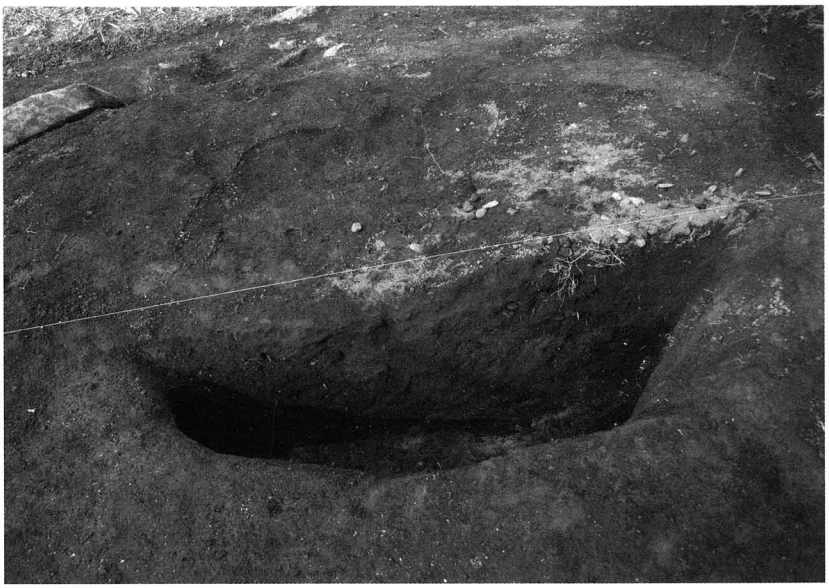
図版第6

a．「ひしね地蔵」
（北から）

b．経塚埋土状況
（南から）

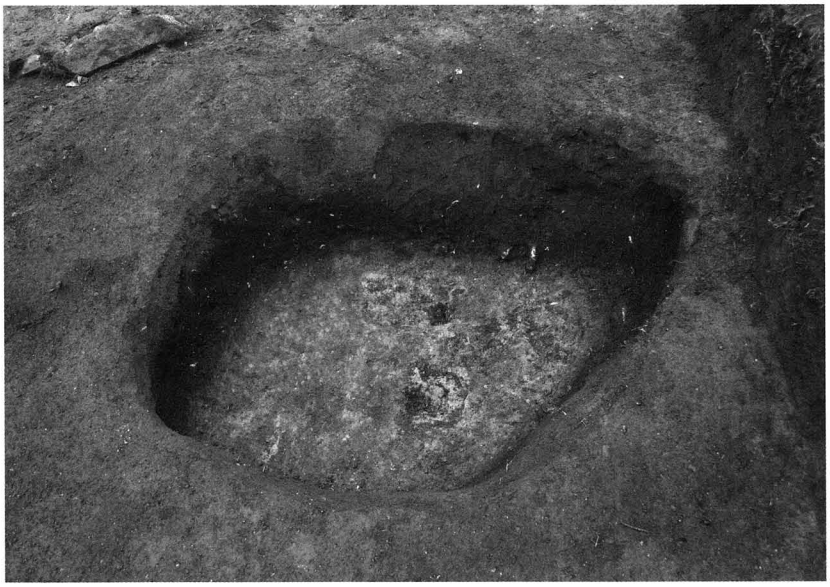
c．土坑検出状況
（北から）

図版第７



a．土坑埋土状況
（南東から）

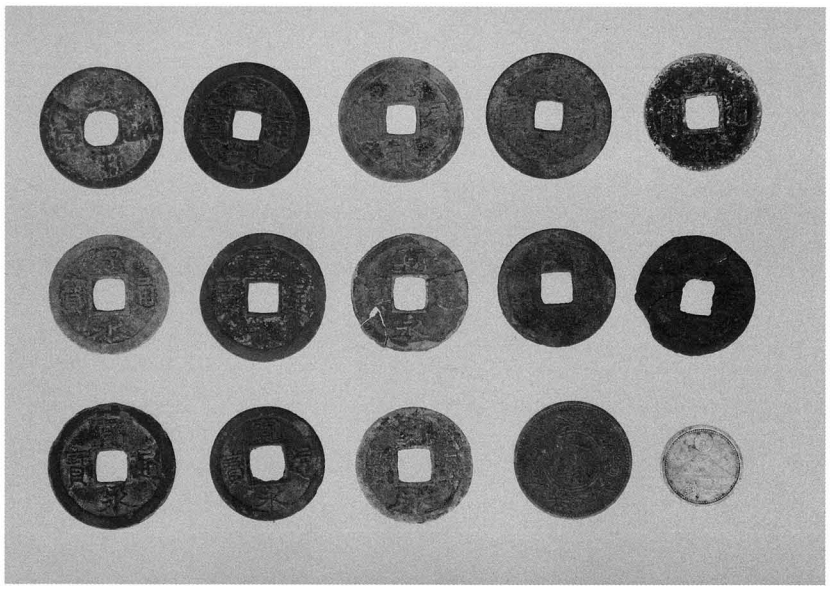
b．土坑完掘状況
（北から）



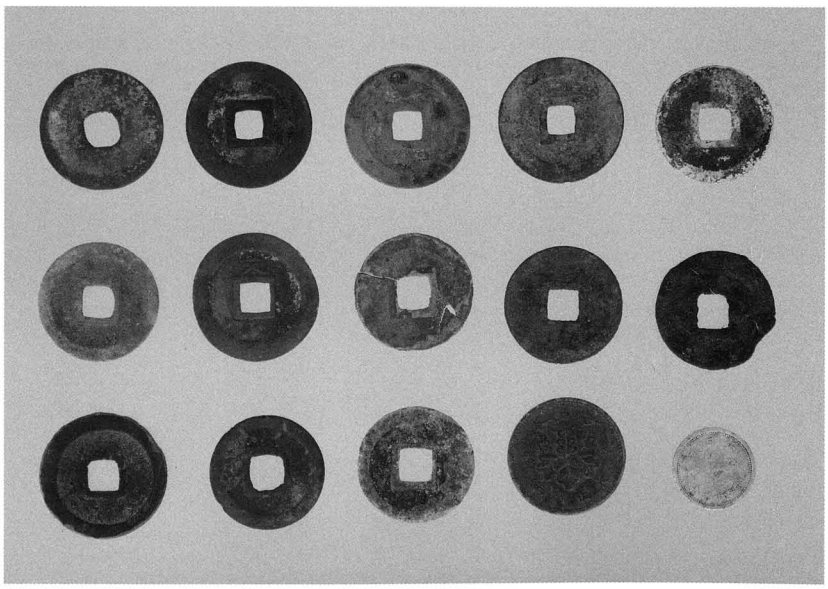
c．同（南から）

図版第8

a．経石

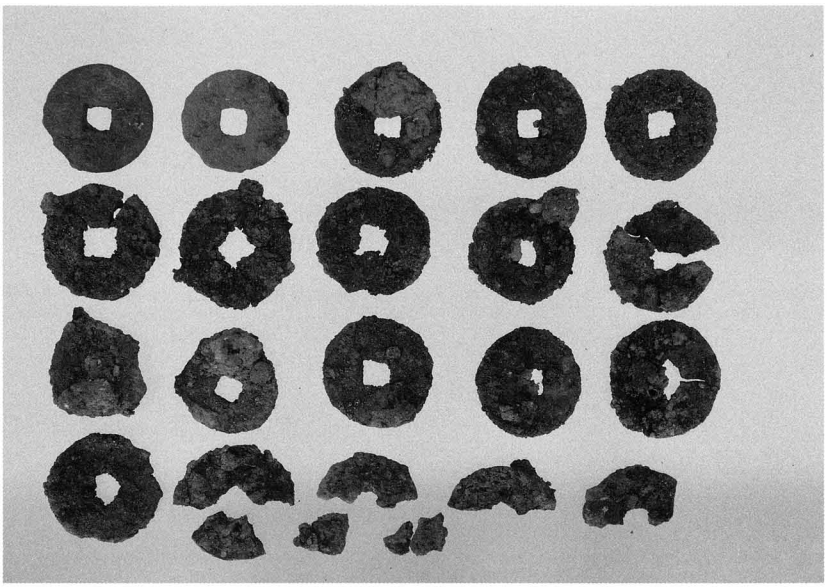


b．銭貨（表）

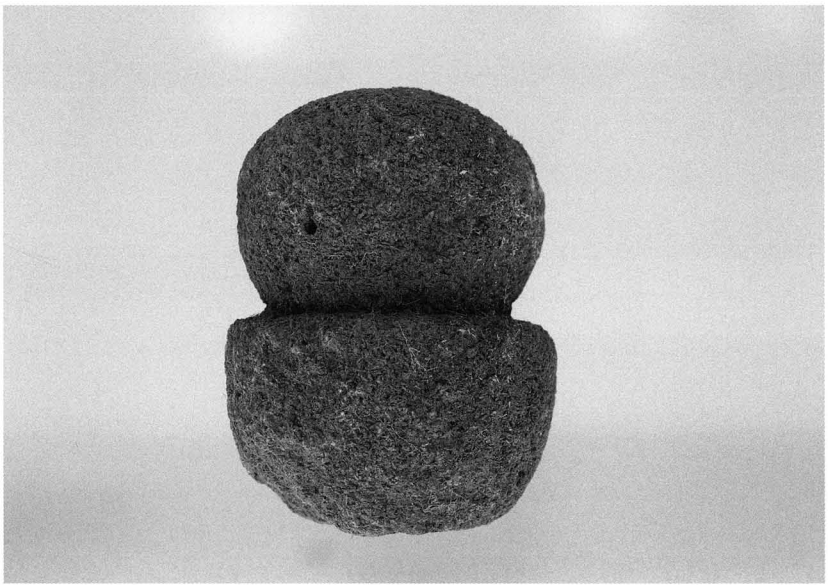


c．同（裏）

図版第９



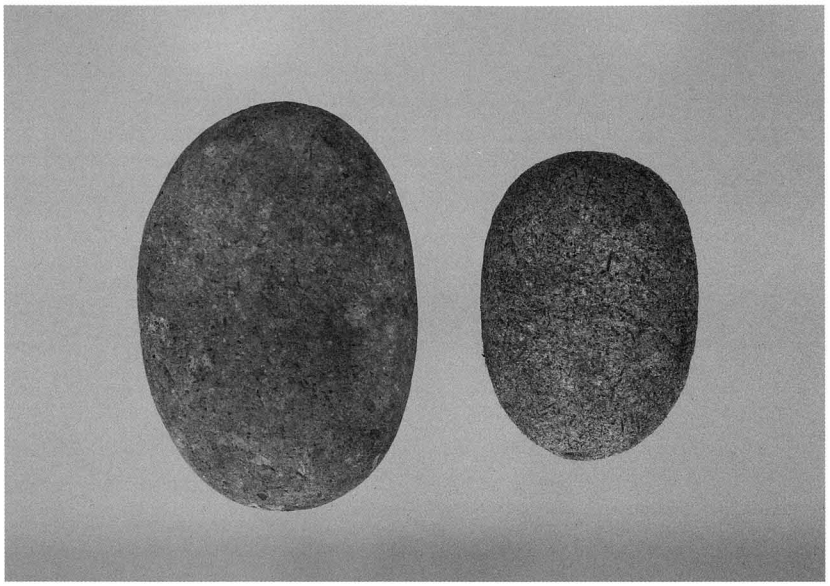
a．銭貨（鉄貨）



b．五輪石（空・風輪部）

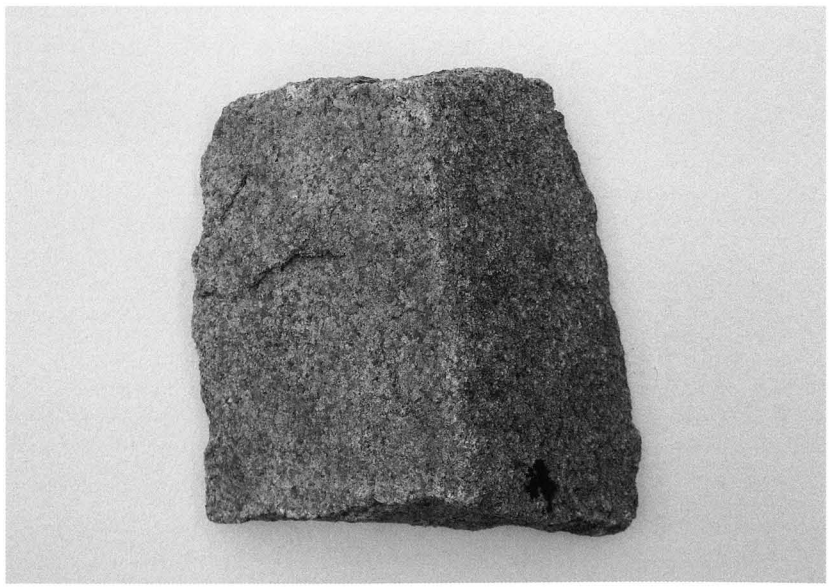
c．宝篋印塔（相輪部）

図版第 10



a．使用痕のある石

b．ひしね地蔵１



c．同２

図版第 11

a．西光寺跡より採集した
遺物（五輪石空・風輪部）

b．同（相輪部）

図版第 12

a．宗林寺経塚出土経石

b．経塚移築後写真
（南東から）

c．同
（西から）

報告書抄録

ふりがな	やいろいしきょうづかはっくつちょうさほうこくしょ
書名	八色石経塚発掘調査報告書
副書名	平成21年度（主要地方道）邑南飯南線八色石工区地域活力基盤創造交付金（改良）工事第１期に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	邑南町埋蔵文化財調査報告書第４集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	森岡弘典、角矢永嗣
編集機関	邑南町教育委員会
所在地	〒696-0317　島根県邑智郡邑南町淀原153番地１
発行年月日	西暦　2011年3月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
八色石経塚	島根県邑智郡邑南町八色石714番地４	324493	H549	34度56分19秒	132度33分31秒	20091216～20100331	25㎡	道路改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八色石経塚	経塚	江戸時代	石積遺構	寛永通宝 一字一石経 宝篋印塔 五輪石	

平成23（2011）年３月

島根県邑智郡邑南町

八色石経塚発掘調査報告書

平成21年度（主要地方道）邑南飯南線八色石工区地域
活力基盤創造交付金（改良）工事１期に係る
埋蔵文化財発掘調査

編集・発行　島根県邑智郡邑南町教育委員会
印　　刷　柏村印刷株式会社